第１回　古典との対話へ(2025 年 5 月 9 日開催)

第１セッション　アリストテレス『形而上学』

・アリストテレスは全ての動物は感覚を有し、そこから記憶→経験→学問・技術が形成されると考えていると読み取ったが、対話の中で経験は「言語化された経験」と「言語化できない経験」があるのではないかと思った。言語化された経験はそこから学び、技術に発展するが、言語化できない経験は無生物、職人、音を聴く能のない動物にたとえられるようなものが持ち、感覚に相当するようなもので「信頼に値する知識」であるが、その応用はできない。言語化された経験は観照的・理論的でディアゴーグを生み出すことができると考えた。

・本日の対話を通じて「感覚」「記憶」「経験」「技術」の関連性を整理するとともに、「感覚」と「経験」はともに「知識」でありながらどのように違うのかという疑問を見出した。「感覚」の説明や、「感覚」と「経験」の違いを通じて、私は「感覚」から「経験」に至る過程で言語化のプロセスが踏まれており、それができるかどうかが学ぶことすなわち「知恵」を得ることにつながるのではないかと考えた。この対話を通して、さらに「経験」を「技術」にするために具体的に何が必要なのか、など細かく突きつめられると良かった。

・以前から「学問は娯楽のような暇つぶし」から始まったと考えていて、アリストテレスも自分と同じようなことを考えていたこと、知への欲求について感覚→記憶→経験→学問とつながっていることを読み取り、なるほどと理解した。

・形而上学の論理構造が、感覚のあとに記憶・経験・技術と体系的になっていることが対話を通してすっきりと頭に入ってきた。経験や技術の定義が本文中ではどうなっているかについて、本文に即して忠実に読むことが自分一人ではできなかったことだと思った。また、フィシスとエトスの話など誤読していたことが多く、家で読むときにもっと注意深く読めなかったのかと悔やまれる。

・どうして「制作的［生産的］な知よりも観照的［理論的］な知の方が、多く知恵がある」と言えるのか読んでいるとき分からなかったが、対話を通じて生産の先に余裕が生まれ娯楽的な発明に行きつくことが分かった。

第２セッション　オルテガ『大衆の反逆』

・この文章はあらゆる所に「大衆」や「少数者」の定義が散らばっていて、そこをしっかりと読み取るのが難しかった。大衆は、権利は手にしているが義務は負っていないという指摘がとても興味深かった。オルテガの警鐘は現代社会にも通じているのでテキストの続きも読んでみようと思った。

・「小さな集団においての最上の場所」について、自分は政府などの社会的権力の座であると読解したが、それだけではなく、前の時代の群衆のいる場ではなかったホテル・汽車なども含まれているという考えを聞き、納得した。現代において「大衆」であることへの圧力が強くなった結果、少数者と、群衆の位置関係が逆転したことに対する警鐘を読み取った。細かい言葉の違いによりいっそう注目して、理解を更にふかめていきたい。

・大衆の反逆というテーマにおいて、「群衆」や「集団」と「大衆」の差別化を図ることは、文章の本質に気づくために重要なことだと思った。「群衆」と「大衆」の違いとして、群衆を量的であり、大衆を質的であるという本文からの解釈がとても理解しやすかった。対話前は、大衆の反対である「少数者」の定義について深く考えてはいなかったが、自分自身に高度な要求をかせるものであるという部分を指摘され、「少数派」の定義について深く考えることができた。

・前提知識がないと理解に苦しむと感じた。オルテガが触れていた大衆が社会的権力の座に登る以前の話や、途中の説明など語句の知識や文のつながりの理解を交えた相当な精読がないと完璧に言っていることを理解するのは困難だと感じた。自分自身が何となく言っていることを理解していることで、逆にいろいろなところに話が飛んでしまった。もう少し精読を重ねたい。